

論文の要約

論文タイトル

有機農家の実践はどのように持続しているのか —農業社会学における農業スタイル研究からの接近—

松平 尚也

2025 年

本研究では、研究課題として「有機農業の実践がどのように持続しているのか」を設定し、農業スタイル研究の分析枠組みから、京都・滋賀を中心とした全国の有機農家を対象とした分析を行った。分析により持続可能な農業政策の推進における有機農家の実践の意義を明らかにすることを目指した。

序章では、世界の農業システムがグローバル化する中で、持続可能な農業の担い手や農家の農業資源に対する主権について注目が集まっている状況を確認した。そこでは農業資源の持続が困難化する中で、有機農家の実践を検討する必要性が高まっていることを指摘した。また本研究の意義として研究と実践、あるいは政策と実践の距離や乖離を接続する重要性について述べた。

第1章・第1節では、有機農業研究を農業の実践の視点から整理し、先行研究の整理を行った。21世紀に入り有機農業研究が増加し、社会科学分野の研究も少しずつ増えている傾向が明らかになった。そこでは有機農業の大規模・慣行化といった社会課題を扱う特徴がみられた。一方で有機農業が始まった初期は、同時代の研究が限定的であることが判明した。そのため草創期の有機農業の実践や有機農業運動に注目し、その展開過程を検討した。検討から有機農業運動が初期の有機農業の展開に大きな影響を与えた点が確認された。

第2節では、本研究の分析視点である欧州農業社会学のワーヘニンゲン学派の農業社会学について実践の視点から整理を行った。そこでは同学派の特徴の1つである「農業スタイル」という概念に注目し検討した。その中でプルーフ農業スタイル研究において農業者が農場内外の組織や環境を接続し農場を発展させ地域の多様な農業を生み出しているという論点に着目し分析視点に援用を行った。

第2章・第1～3節では、世界で資本主導の持続可能な農業が展開する中で有機農家の実践に注目する必要性の確認と課題の設定を行った。また有機農家の実践の視点から先行研究整理を行い、実践主体としての小農の再評価や個々の有機農家への注目した研究が少ない傾向を確認した。さらに分析視点としてプルーフ農業社会学の小農論における共同・生産と自立/自律性そして日本的共同・生産を設定した。第4～7節では、調査対象である有機農家の特徴を紹介し、研究方法を示した。また分析視点から議論の整理・分析を行った。さらに考察と結論として各農家が農民生産における社会的関係を基盤として自然・社会資源を

相互作用・変容させ独自の実践を展開している点を確認した。その軌跡は小農や家族農業の再生的新展開と有機農業の広がりをも有機的に接続するものでもあることが明らかになった。

第3章では、有機農家の実践主体としての小農を検討した。第1・2節では小農の定義やプルーフ小農論について整理し、第3節では日本における小農再評価に決定的な役割をはたした小農学会の思想的系譜を確認した。第4節では、小農学会会員の実践を検討し、プルーフの新農業開発パラダイムの視点からの検討を行い、日本における新しい小農層の議論を整理した。

第4章では、有機農家の農業形態としての家族農業を検討した。第1節では新自由主義時代における家族農業の状況と意義を研究背景として設定した。第2節では、日本で蓄積してきた家族農業の関連研究を整理し、第3節で資本によらない小経営農業の可能性と新自由主義的な自立/自律性と本来的な自立/自律性という分析視点を設定した。第4節では、研究対象である各家族農家の聞き取り結果をまとめ、第5節ではその結果を分析し考察した。第6節では、結論として農業基盤の維持が再生産条件であるという日本固有の特徴が家族農業を継続させているという論点とともに、農家らが農業生産の持続のために家族農業という形態を再評価している傾向が明らかになった。

終章では、検討から導き出された研究課題に対する結論のまとめを行った。第1に明らかになったのは、有機農家が地域の自然資源や社会資源を活かし、農場において農業生産における社会的関係を基盤として独自の実践を展開している状況である。第2に明らかになったのは、有機農家が新しい小農層の議論で見られた資本からの自立/自律性を追求し、規模拡大や効率性とは異なる実践を展開している点であった。第3に明らかになったのは、有機農家の実践において家族農業の役割と機能を活用し農業資源や農村を守るという日本の特徴が見られたことである。第4に明らかになったのは、小農や家族農業と有機農業を再定義しその概念を拡張する可能性である。そこでは単に有機農業と小農・家族農業が親和的というだけでなく、その実践において小農論や家族農業論と農業・農村の持続が共同生産され地域農業の持続につながるという方向性が確認された。この方向性は日本の農業と社会変革の中心となる理論的可能性1つの可能性の発見と言えるだろう。